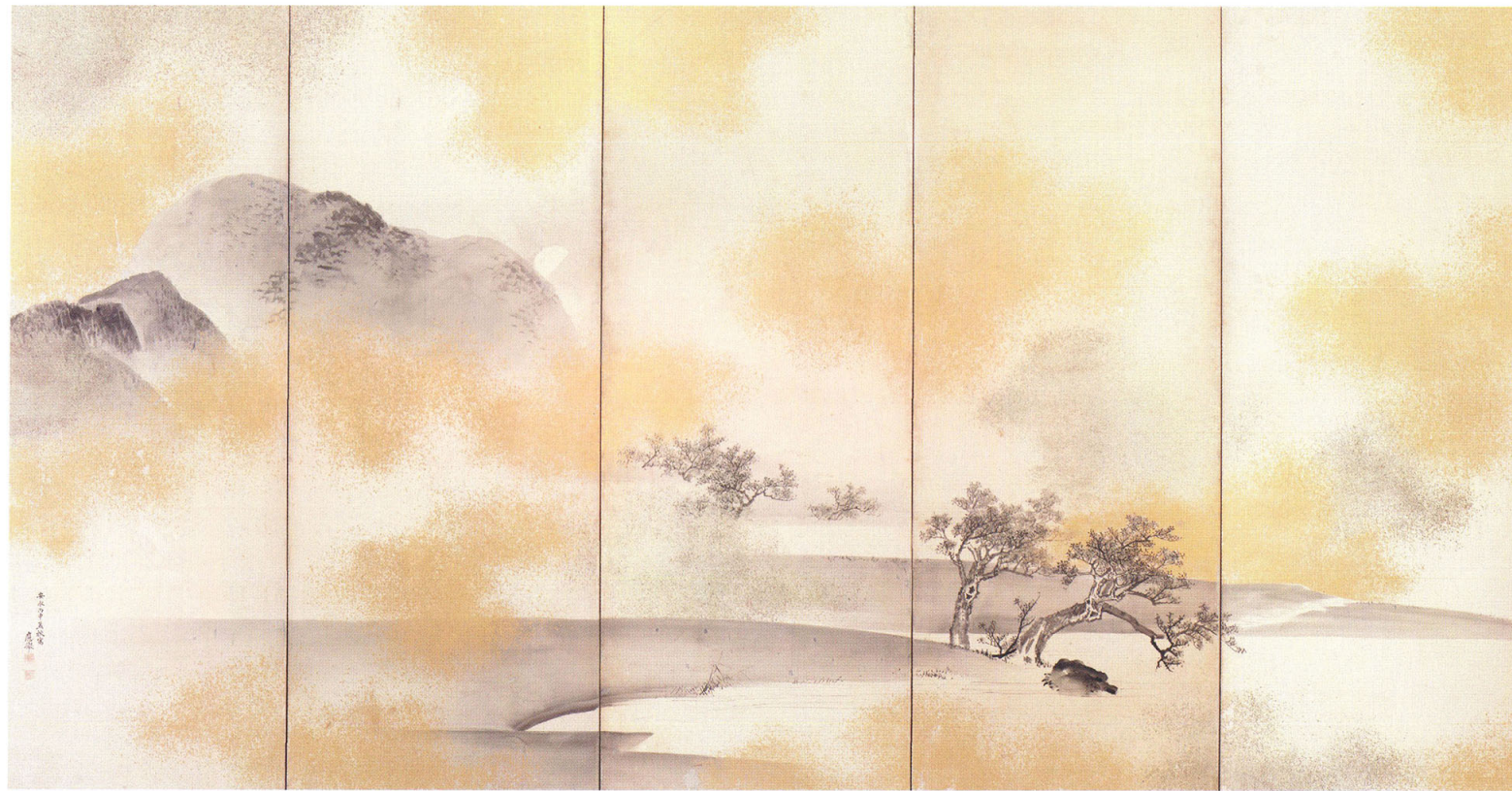


右隻



左隻



22 江州日野村落図屏風 円山応挙

六曲一双

江戸時代、安永五年（一七七六）
紙本墨画

各一五四・五×三五〇・四

近江の日野村（現在の滋賀県蒲生郡日野町）郊外の様子を描く、穏やかな風景図である。数種類の金銀箔を用いて金色と白金色の雲を交ぜ散らして両隻全体に施す様子は、図様は連続しないものの、両隻ともに左隻左側の山の端にかかる半月からの薄明かりに照らされた一連の景色であることを示している。日野川を中心とした構図であろうか。左隻には何かの品物をのせた小舟が月明かりに誘われるかのように家路へと船を操る。また右隻には河岸の小高い丘に建つ質素な家屋で、文士が月明かりをたよりに読書にでもふけるような様子が描かれる。ゆったりした筆遣いによる落ち着いた水墨表現、広い空間に施された細かな金銀箔による穏やかな雲霞は、清らかな静寂感に溢れた、実に叙情豊かな画面を作り上げている。

本図は、画中の款記より、安永五年（一七七六）七月の制作と判る。この年、応挙は四十四歳。この円熟期の彼を代表する作品（藤花図屏風）（根津美術館蔵）や《雨竹風竹図屏風》（京都・円光寺）といった名品を制作している。これより前、明和期には近江円満院門主・祐常との交流があり、祐常が、円満院宮絵師円山主水とその記録で記すほど、応挙は円満院のお抱え絵師的存在であった。盛んに京都と近江を行き来した応挙が、少し足を伸ばし、実際に日野の地を訪れてとらえた風景であろう。写生をした実景に詩的感性が十分に加味された本図は、当時拡大しつつあった文人画にも通じるもので、応挙の作画の幅広さを示している。

本作品は、明治二十六年（一八九三）に買い上げられた作品で、それ以前の来歴は不明である。

- ・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出典を明記してください。また，図版を出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

名所絵から風景画へ——情景との対話

三の丸尚蔵館展覧会図録 No. 76

編集 宮内庁三の丸尚蔵館
制作 株式会社 東京美術
翻訳 黒川廣子
発行 宮内庁
平成二十九年三月二十五日発行

© 2017, The Museum of the Imperial Collections, Sanjōmaru Shōzōkan